

わり算

高橋梨咲

$3 \div 2 = 1$ あまり1'

$42 \div 8 = 5$ あまり2'

$59 \div 6 = 9$ あまり5'

宇宙・空間 || 時間あまり塵

咽頭炎・ウイルス || 怠惰あまり熱

日常生活・関係 || 人間あまり消閑

あまり。割り切れないこと。あまるもの。非、同一的であるためのもの。

あまり 1' 2' 3' 4' 5'

ケバブ・冗談 || 私の微笑あまり葛藤

今はもうしばらく行っていないけれど、

私がよく行くケバブ屋さんがあった。

私はそこによく行った。

私はケバブがとても好きというわけではないが、しかしながらケバブスタンドを見ると、私はそれをのぞき込み、そして、

勝手に繰り広げられる冗談の応酬に、私は絶対に失敗してはいけないと思うから、冷や汗を流す。

私は、別にこのおじさんに何か義理があるわけでも、借りがあるわけでもない。

のに、精神がすり減る。

私はおじさんにとって、取るに足らない女なのだということを自覚させられ、涙をこぼさんばかりに歩き、ほんのりと温かいケバブをもって、どこかにいなくてはいならないという苦痛が私にはどうしても耐えられない。何千万人もいるおじさんの女の中の、さらに取るに足りないひとり。そして日は沈み、明日がやってくる。明日がやってくるにもかかわらずケバブスタンドは相変わらずそこに立ち続けていて、私のがぞけば別におじさんはまたその応酬をはじめだろうことは明白なのに、私はどうすることもできず、ちょっと筋肉をこわばらせながら、そして精神もそれに連動させながら、そしてそれのせいで精神科にも通いながら、表面だけでは礼儀正しい女を演じつつ、しかしながら私はどうしようもないおじさんに対する鬱屈を抱えており、私の女としての自信や女としての誇りなど、女として存在している以上はそこまで深く考えなくても別にいい問題を、私はくよくよと悩み続け、私の中から律儀に流れ出るところとしたチリソースとの和解を試みながら、私は明日を生きなくてはならないなんて何て不幸なんだ！ と考えきることでもできず、私は明日を生きていくわけだが、しかし私はあのケバブスタンドを見る度このことを思い出してしまうだろうとは思う。

ケバブ・女Ⅱ愉快あまりチリソース